

# 英雄の書

〈念歌〉あるいは〈黄衣の王の忌歌〉

天地の境目さえしかとは見定め難い、この蒼灰色の雲と霧。流れ、流されて入り交じりながら重く垂れ込め、屍衣にも似た冷やかさとしめやかさで、すべてを包み込む。

この地——古の時代からここに有り、遙か未来もここに存在し続ける。

限りなく無に近い静寂のみを統治者に、時の流れの恩寵から見放され、その軀からも解き放たれている。

国ではなく、郷でもない。ここに居る者どもは、ただ「この地」と呼ぶ。ここを訪れる運命に見舞われた者どもは、雄弁なる沈黙のなかに、この地の真の呼称を、かく読み取る。

「無名の地」と。

如何なる奇遇に抛りしか、相まみえて今、この一文を照覧しある善良なる人びとよ。構えて約定を違え給うことなかれ。

無名の地の物語を、人には問わず。

無名の地の言葉を、その口唇にのぼせず。

無名の地に囚われし者を、人として遇せず。

これより後、夕べのひとつときを費やして語られるべき物語は、二人の幼子と、一人の僧侶と、一人の魂なき流浪者の織りなす、忌まわしき命の物語である。

我ら「紡ぐ者」は、永劫の時の流れのうちに、幾度となくこの忌まわしき命の相貌を垣間見た。

我らはそれを記し、それを語り継ぎ、それを懼ること甚だしく、それを待望することまた甚だしきが故に、かの忌まわしき命の描き出す暗黒の光芒を、世界から世界へ、時代から時代へ、旧き神から新しき神へと、受け渡し続けてきた。

我らは咎人である。

すべての物語は、等しく、紡ぐ者の罪業にほかならぬ。

善良なる人びとよ、貴方の夢に平穏あれ。我ら紡ぐ者が足踏みを許されぬ楽園の地に、貴方の憩う家の窓明かりは灯る。

その明かりのもと、かの忌まわしき命の訪れを請い願ひ給うことなかれ。

その明かりを消し、窓辺で耳を澄まし、かの忌まわしき命の声音を待ち給うことなかれ。

されば貴方の道の先に無名の地はなく、この物語は言霊なき言の葉の集積に留まり、貴方の歩みを遮ることもない。

その忌まわしき命の名を「英雄」という。

時に「黄衣の王」を名乗る者である。

## プロローグ 破獄

挽き割り麦の丘へと続く長い坂道を半ばまで登ったあたりで、若者は鐘の音を耳にした。

立ち止まり、顔を上げる。冷ややかにたちこめる蒼灰色の霧の奥深くから、霧の衣の厚みをやすやすと通り抜け、慥かに響いてくる。足元から震えが伝わってくる――

大鐘楼の一の鐘の音だ。

若者は立ちすくんだ。これからどうすればいいのかわからない。一の鐘の音が意味するところを、彼は熟知していた。だが、実際にその音を聴くのは、彼の生涯において初めての経験だったからである。

丘の上まで行けば、作務についている朋輩たちも、咎の大輪を押す手を止めて、彼と同じように立ちすくんでいるはずだ。足を急がせ、そのなかに混じればいい。言いしれぬ不安と共にここで凍りついているよりは、ずっと。

だが。

ここにあるのは不安だけだろうか。若者は、黒衣に包まれた己の胸に掌をあてた。

彼ら「無名僧」は、その呼称のとおり、名を持たない。それ以前に個々の存在ですらない。この地――「無名の地」の分身であり、ひと欠片であり、その意志を体現するために作り上げられた些末な部品に過ぎぬ。

魂はない。

それでも、いやだからこそ、時の軛から解き放たれたこの地の永劫のなかで、本来は魂があるべき器に、宿るものが生じる。かつてこの地を訪れた、他の世界からの来訪者たち――星々とも、国々とも呼ばれる、名と色彩を持つ命ある場所から訪れた者たちは、無名僧のうちに宿るそのものを、様々な名称で呼んできた。それは感情だ。それは心だ。あるいは、それをこそ人間らしさ、というのだ、と。

どうあれ、そのものは、今若者が掌をあてているあたりに宿るものだという。

この地に時はない。時がなければ、日常は形成されない。無名僧にあるのは、丘の上の作務と、万書殿の警備の繰り返しのみ。休息はないが、疲労もない。この地で、予想のつかない動きをするものといえは、ただ雲と霧の流れだけである。

それを退屈と感じないのかと、ある来訪者が尋ねたことがある。

退屈とは？

倦むということだ。飽き飽きするということだ。

同じことを繰り返していれば、誰でもそうなる。

無名僧は、「誰」ではない。「誰」でもない。だから、倦むということもない——  
はずであったのに。

若者は、薄っぺらい黒衣の下の瘦せた身体の奥深くから、震えがこみあがってくるのを感じていた。慥かに、彼は倦むことを知らなかった。が、今の今、それとまったく逆の思いがここにある。

逆のあるところには、真もある。

若者は身体はどこかで——本来ならば魂が宿るべき空っぽの器のなかで、己が一の鐘の音を待っていたことに気がついた。

事が起こる。事が動く。

ほどなく、新たなる来訪者がこの地へ足を踏み入れることになる。

私はそれを喜んでいる。

若者は、胸にあてた掌を握りしめ、拳をつくった。目を閉じると、己の身体の震えがいつそう強く感じられるようになる。

一の鐘は鳴り続けている。若者の禿頭に、霧が触れて小さな水滴となり、やがてこめかみを伝って流れ落ちる。深く吐き出す息は白い。裸足の足先は、丘へ続く道の泥にまみれている。

やがて、霧の流れに乗って、かすかに念歌が聞こえてきた。若者は目を開き、丘の頂上を振り仰いだ。まだ何も見えない。霧が動いて、念歌はその奥から聞こえてくる。ああ、朋輩たちだ。

目を凝らすと、やがて彼らが掲げる松明の明かりが、霧のなかを飛びかう精霊のようにたより

なく、左右に上下に、ふわりふわりと漂いながら近づいてくるのが見えてきた。

無名僧の集団が降りてくる。若者そのものであり、若者の一部であり、若者がその一部である、黒衣の僧ども。

同じ禿頭。同じ裸足。同じ声。同じ顔。数えきれぬほど大勢でありながら、一人しかいない。

若者はようやく拳をほどくと、唱和しながら歩き出し、そのなかに混じった。

彼らであり、我である朋輩たち。若者はしかし、朋輩たちの念歌の旋律のなかにはないものを、その胸のうちに隠し持っている。

丘を下るほどに、一の鐘の響きは朗々と猛々しくなる。念歌は霧に生まれ、万書殿の頂が、霧のヴェールを透かして姿を現す。若者は集団の最後尾にまで下がり、再び足を止め、呼吸も止めた。

霧を仰ぎ、彼は呟く。

——あれが、獄を破った。

戦いが始まる。

## 第一章 壊れてしまった大切なもの

誰でも眠気を誘われる、温かな春の昼下がりのことだった。五時限目の授業。鉛筆を握って、目をちゃんと開いて、でも頭は眠っている。なにしろ給食を食べてお腹はいっぱいだし、もともと苦手な理科の時間だ。

「ユリ、ユリ」

隣の席の佳奈ちゃんが、小さな声で呼びかけてくる。消しゴムの欠片も飛んできて、机の上でぼんと跳ねた。

「頭が揺れちゃってるよ！ バレちゃうよ」

森崎友理子は、びくつとして目を覚ました。幸い、片山先生は板書の最中で、こちらには背中を向けている。友理子はあわてて目をこすった。

佳奈ちゃんが手で口を押さえて笑っている。友理子も照れ笑いを返した。二人の席はちょうど教室の真ん中あたり。くると見回すと、どうやら二十五人のクラスメイトの半分くらいは居眠りしているか、しかかっているようだ。

友理子は黒板の上の時計を見た。授業が終わるまで、あと二十分だ。何とか起きていなければ。手元のノートに目を落とすと、上から三行目ぐらいで字がぐちゃぐちゃになっていた。そのへんで眠りの国に入ってしまったのだろう。

「佳奈ちゃん、あとでノート見せて」

囁き声を出したとき、ちょうど片山先生が振り返った。眼鏡の縁を指で押し上げ、友理子の上で視線を止める。

「森崎さん」

呼ばれてしまった。佳奈ちゃんはすかさず下を向いて鉛筆を動かし始める。

「おしゃべりは禁止だよ」

「はい、先生」

友理子は首をすくめる。だけど先生、まわりの寝てる子たちはどうなんですか？ あたしは起きてるだけマシだと思っただけだな。

そんな言い訳と反抗心が顔に出ているのだろう。片山先生はチョークを置くと、白くなった指先をほんぽんと叩いて、片手を腰にあてた。

「このクラスは、先月の理科テストの平均点が、区内の五年生で最低だったんだぞ。科目に好き嫌いがあるのはある程度仕方ないし、みんなに百点をとれとは先生も言わないけど、しかしね——」

お説教に、居眠りから覚めるクラスメイトたちがちらほら。友理子は、乱れたノートの字を、

暗号を解読するようになぞり始めた。

そのとき、教室の前のドアが軽くノックされた。片山先生が、半端な怒り顔で教壇を降りる。友理子はずっと暗号解読に励んでいたから、どんなやりとりがあったかわからない。ぴしゃん！とドアを閉める音が大きく響いて、顔を上げてみたら、片山先生がこっちを見ていた。

こっち、じゃない。友理子を見ていた。眼鏡のレンズにちょうど光が映ってしまっ、先生の目玉が見えない。

「――森崎さん」

教壇に戻らず、ドアのそばに突っ立ったまま、ちよつと音程が狂ったみたいな声を出す。

「すぐ、帰る支度をしなさい」

教室のみんな（起きている生徒はみんな）が、一斉に友理子に注目した。視線がバラバラと顔にあたるのがわかるくらいだった。友理子にはそういう経験がめつたにない。目立たなくてつまらない生徒だからではなく、いい感じに目立たない生徒だからである。

「あの、えつと」

言われたことの意味がわからなくて、友理子はぐるりを見回した。誰かが教えてくれないかと思つたのだ。先生、今なんて言つたの？

と、片山先生は急にネジを巻かれたみたいに動き出した。机のあいだを通り抜けて友理子に近づいてくる。動きがぎくしゃくして変だ。

友理子の机の脇で足を止めると、片手を机に、片手を友理子の肩の上に置いた。

「ご自宅で急な出来事があつて、お母さんから電話があつた。すぐ帰りなさい」

ただこちらを注目してただけのクラスメイトたちが、さざめき始めた。キビキだ、キビキという声が友理子の耳に入った。キビキつて何？ 誰か死んだんだよ。

佳奈ちゃんだけが、不安そうに友理子を見つめている。でも、先生がまた動き出し、教室の後ろに並んでいるロッカーに近づいてゆくと、友理子より先に声を出した。

「先生、あたしが手伝います！」

片山先生は今にも友理子のロッカーを開けようとしているところだったけれど、佳奈ちゃんの声に振り返った。前の席の佐藤さんも椅子から降りて、友理子のそばに来た。ほかにも立とうとする生徒たちがいて、先生が教壇へ引き返しなから、

「みんなは座つて！ 座つて！」と、大きな声で呼びかける。やつぱり音程がまだおかしい。

佳奈ちゃんが持つてきてくれた通学鞆かばんに教科書やノートを詰め込みながら、友理子は顔が赤くなるのを感じた。なのに胸は冷たさわめいている。

鞆を抱えて廊下に出ると、片山先生と一緒にいてきた。さらに驚いたことに、そこには学年主任の木内先生がいた。友理子に会つて、急にほどけたみたいな顔をした。

「支度できたのね。じゃあ行きましよう」

先生の手が友理子の背中に触れる。木内先生は友理子のお祖母ちゃんぐらゐの歳で、背が低くてたつぷり太つていて、汗っかきだ。今も、背中に触れた手から高めの体温が伝わってきた。

「よろしくお願ひします」

片山先生が頭を下げて見送っている。友理子が廊下を曲がるまで、そこに立つたままだった。「木内先生、うちで何かあったんですか？」

歩きながら問いかけた。木内先生は足元を見て歩いている。早足なので、由里子も小走りで行っていかなくてはならない。先生は片手でずっと友理子の背に触れているのに、目は逸らしてゐる。

「ご両親が待つておられるからね」

さっきの片山先生の歩き方と同じくらい、ぎくしゃくした口調だった。

「とにかく、早く帰りましょう」

キビキ。誰か死んだんだ。さっき耳に飛び込んだ言葉が、友理子の頭のなかでふるふると震える。死んだって、誰が？ お父さん？ お母さん？ でも今、木内先生は、うちで両親が待つてるって言った――

今までの驚きが全日本選手権級だとすると、その先にはオリンピック級の驚きが待ち受けていた。校門のすぐ外にタクシーが一台停まっかけていて、ドアの脇に校長先生と教頭先生が立っていたのだ。

「ああ、森崎さん」

校長先生に名前を呼ばれた。校長先生って、由里子みたいな目立たない生徒の名前までいちいち覚えてるものなの？

「何も心配しないでいいからね。おうちまで、木内先生がついて行ってくれるから」

教頭先生が「おうち」って言った。

友理子は木内先生と二人でタクシーに乗り込んだ。家までは、友理子の足でも歩いて十分くらいの距離だ。それをタクシーで走るなんて。

友理子の家は、十階建てのマンションの五階にある。築十年の「エンゼルキャッスル石島」。天使なんか住んでいそうにない、灰色の外壁にスチールの外階段の素っ気ない建物だ。

タクシーを降りると、木内先生は友理子の手を取った。先生と手をつなぐ？ 一緒にタクシーに乗ること以上に、あり得ない話だ。

「木内先生」と、友理子はもう一度、隣を歩く先生の顔を仰いだ。「さっきタクシーに乗るとき、校長先生が何かお話ししてたでしょう？ あれ、何のことですか」

校長先生は木内先生に、「あとのことはよろしく」とか言っていた。木内先生は、切羽詰まってみたいな目をしてうなずいていた。

「学校のなかのことだから」

木内先生の笑顔は、ちゃんとした額に納めずそこらに立てかけたパズルの絵のように、今にもバラバラと壊れて落ちそうなほど脆く見えた。

「森崎さんは心配しないでいいですよ」

小学校五年生となれば、もう幼児じゃない。まだ子供ではあるけれど、立派にシシユンキの入口に立っている。校長先生が朝礼でそう言っていたことがあるんだから、これは友理子の勝手な思いこみではないはずだ。

なのに、そんな友理子に向かって、口を揃えて「心配しなくていい」なんて、赤ん坊をあやすようなことを言う。どうして？

エレベーターを降りると、友理子は先生の手を振り払うようにして駆け出した。

玄関のドアには、鍵がかかかっていなかった。

「たっだいま！ お母さん！」

靴を脱ぎ捨てて廊下を駆ける。奥のリビングから、お母さんが出てきた。

「あ、友理子」

お母さんは無事だ。ちゃんと生きてる。死んだのはお母さんじゃない。

お母さんは友理子に飛びついてきた。ぎゅつと抱きしめられて、理恵子は本日三度目の驚愕を味わった。オリンピック級のさらに上、サッカーのワールドカップだ。

「お母さん、どうしたの？」

お母さんの身体が震えている。顔から血の気が引いている。涙ぐんで、目が真っ赤だ。

「学年主任の木内です」

木内先生の挨拶に、お母さんはやつと友理子から離れて挨拶を返した。どうもありがとうございます、本当に申し訳ございません——

御礼を言つて、謝つてる。ねえ、ホントにホントに何があったのよ？

「その後、学校から連絡がありましたか」と、木内先生が尋ねる。

「いえ、まだ……」

お母さんの目から涙の粒がこぼれ落ちる。

「まだ見つかからないようなんです」

見つかからない。誰が？

学校？ 友理子の？ おかしい。木内先生の学校のことじゃないか。何を言ってるんだ。

「ねえ、どうしたの？」と、友理子はお母さんに訊いた。お母さんはぼろぼろ泣いている。

「お母さん、友理子さんに事情を話してあげてください。電話にはわたしが出るようにしますので、少しのあいだお二人でどうぞ」

木内先生は、いよいよ盛大にパズルの破片をこぼしながら友理子に笑いかけた。

「友理子さんのお部屋で話すといいね」

お母さんの肩に優しく手をかけて促した。お母さんは友理子の手を強く握って立ち上がる。

リビングから廊下に出て、すぐ左手の部屋。ドアノブに小さなぬいぐるみをぶらさげているのが目印だ。友理子の部屋。

その隣は——

友理子のお兄ちゃんの部屋だ。毎朝、登校するときにはいつもきちんとドアを閉めて出る。中学二年生になって、一段と「プライベート」とやらにうるさくなった。

そのドアが、今は開いている。お兄ちゃんの机と椅子が見える。椅子の背にはジャンパーが掛けっぱなしになっている。

友理子の兄。森崎大樹。十四歳。



友理子は、心のなかであつと声をあげた。学校というのなら、それが友理子の学校のことじゃないのなら、お兄ちゃんのことじゃないか。

友理子の部屋に入ると、お母さんはドアを静かに閉めた。友理子を学習機の椅子に座らせ、自分はフロアリングの床の上に座り込んだ。へたへたと崩れたような感じだった。

すかさず、友理子も椅子から降りてお母さんにびつたりとくつついた。

「お母さん、お兄ちゃんがどうかしたの？」

家で何かあった。そう聞かされたとき、友理子の頭にも心にも、大樹のことはまったく浮かばなかった。なぜならお兄ちゃんは、絶対安全確実のヒトだからだ。成績優秀でスポーツ万能。小学校一年生のときから少年野球チームに入っていて、四年生でピッチャーとしてレギュラー入り。中学では水泳部に所属して（泳ぐと肩が強くなるんだと言ってた）、そちらでも活躍している。

もしもお兄ちゃんに何かが起こったのだとしたら、それは事故だ。交通事故とか、プールで溺れたとか。ううん、今の季節じゃプールには入らないか。じゃ、やっぱり交通事故だ。

「お母さん、お兄ちゃんが車にはねられたの？」

お母さんは両手で友理子の手を握りしめる。顔は涙に濡れ、瞼を開いていることさえできない。しゃくりあげている。友理子も泣き出しそうになった。お母さんがこんなふうに泣くなんて。大人がこんなふうに泣くなんて。

「お兄ちゃん、死んだの？」

お母さんは目を閉じたまま首を横に振った。友理子の心に刺さっていた「死」への恐怖が、す

ると抜けた。キビキという音の響きも消え失せた。ああ、よかった。お兄ちゃんが死んだわけじゃないんだ。

それなのに、どうしてお母さんは泣くの？

「お兄ちゃんがね」

「うん」

「学校で、お昼休みに」

「うん」

「友達と喧嘩したんだって」

お母さんの声がかすれる。

「それで、友達に怪我をさせてしまって」

息をついで、またしゃくりあげる。

「きつとびつくりしたんでしょうね。学校から逃げ出しちゃったの。今、どこにいるかわからないから、中学の先生方と、町の消防団の人たちが捜してくれてるのよ」

友理子の心から、また何かが抜けた。今度抜けたものの正体は、友理子自身にもわからなかった。抜けてはまずいものなのか、抜けた方がいいものなのかもわからない。

「心配しないで」

泣きながら、お母さんは友理子の髪を撫でた。

「きつとすぐ見つかるから。お兄ちゃんが見つつかれば、怪我をさせちゃったお友達のところへ、

お父さんとお母さんと一緒に謝りに行って、それですぐ丸くおさまるからね」

優しい声だったけれど、その声はお母さんの表情を裏切っていた。お母さん自身は、すぐ丸くおさまるなんて思っていないのだと、友理子には感じ取れた。

「お父さんは？」

お兄ちゃんとお父さんは仲がいい。最近、お兄ちゃんの方はちよつと突つ張つてみせるときもあるけれど、でもお父さんには自慢の息子なのだ。

「すぐ心配してるよね？ 中学の先生たちと一緒に、お兄ちゃんを捜してるの？」

うん、とうなずいて、お母さんは胸の奥から何かを吐き戻すように泣き始めた。

お母さんは嘘をついてはいなかった。でも、真実を打ち明けてくれてもいなかった。友理子がそれを知るには、日暮れまで時がかかった。

友理子のお兄ちゃん——森崎大樹は、その日、学校にナイフを持って行ったのだ。家から持ち出したのではなく、どこかで買って持っていたものらしい。それを見た人の話によると、刃渡りが十五センチぐらいのナイフだったそうだ。

大樹はそれで、同じクラスの男子生徒を二人、傷つけた。

一人はお腹を刺し、一人は首を刺した。

首を刺されたクラスメイトは、救急車が到着したときにはもう息がなかった。

昼休みのことだったし、そういう出来事が起こったのは教室ではなく、大樹たち三人のほかに誰もいない体育館の裏側だったから、誰も事件に気づかなかつた。お腹を刺された生徒が這う

ようにして助けを求めに行くまで、誰も何も知らなかつた。

先生たち、生徒たちが事態を知つて大騒ぎを始めたとき、森崎大樹は姿を消していた。

同級生を刺したナイフを持つたまま。

誰も、彼が学校を出てゆくところを見ていない。走つていったのか。歩いていったのか。泣いていたのか笑っていたのか。それとも怒っていたのか。

あるいは、怯えていたのか。

森崎家にはいろいろな人びとが集まつてきた。大樹の中学の先生たちや、PTAの人たち。警察の人たち。消防団の人たち。近所の人たち。

森崎家の親戚は、みんな遠くに住んでいるので、その日のうちには来ることができなかった。そのかわり、うるさいくらいに電話がかかつてきた。

家で、友理子はお母さんと二人、ただ待つことしかできなかった。お父さんからは、お母さんの携帯電話に連絡があつた。一度は友理子も代わつてもらつたけれど、お父さんの声を聞いたら、黙つてうなずくだけで何も言うことができなかつた。

日が暮れて、夜が来た。森崎大樹は見つからない。

夜のニュースで、事件のことが報道された。友理子のお兄ちゃんは、「A少年」と呼ばれていた。地元の警察署が、一刻も早く少年を発見・保護するために、情報の提供を求めていると、ニュースキャスターが深刻な顔で言つた。

友理子のまわりで時間が過ぎてゆく。

友理子は大樹の部屋にいたいと思った。そこで待つていれば、お兄ちゃんが帰るような気がした。

でも、それは許されなかった。大人たちが入れ替わり立ち替わりして、お兄ちゃんの部屋のなかを調べていたから。

お母さんは何度も、何度も、何度もお兄ちゃんの携帯電話にかけていた。電源が切られていると言っていた。それでも何度もかけ直していた。

小学生の友理子は、自分の携帯電話をまだ持っていない。友理子の友達——佳奈ちゃんは痩せるほど心配してくれていることだろう。でも、家の電話はひっきりなしに誰かからの連絡が入っている、つながらない。お兄ちゃんの部屋に入れないのなら、せめて佳奈ちゃんと話したいと思いつながら、友理子はぼつんと椅子に腰かけていた。

誰もがみんな、友理子の存在を忘れていた。

その「みんな」には、友理子自身も含まれていた。ここにいるのに、いないような気がした。森崎大樹と一緒に、森崎友理子も行方不明になっているような気がした。

本当にそうなのかもしれない。友理子の魂は、今、お兄ちゃんのそばにいるのかもしれない。人間は誰でも、そういう能力を秘めているのだと、以前、テレビ番組である人が話しているの聞いたことがある。身体を置き去りに心だけを自由自在に移動させて、見たり聞いたり感じたり、話し合ったりすることができると。

お兄ちゃん——友理子は心のなかで呼びかけてみた。お兄ちゃん、聞こえる？ 友理子だよ。

帰ってきて。みんな心配してるよ。

うんと強く呼びかければ、友理子の身体を離れて大樹のそばにいる友理子の魂が、この声を伝えてくれる。十分に強く願えば。

一晩中、友理子は呼びかけ続けていた。

返事は返ってこなかった。

食事をしたのだろうし、トイレにも行ったのだろう。少しは眠ったような気もする。でも、実感がなかった。

お母さんは泣き疲れていた。

まぶしい朝日が、レースのカーテン越しに友理子の部屋にさしかける。友理子は朝寝坊だけど、お兄ちゃんも早起きだ。小さいときから朝練の習慣がついているからだと言っていた。今も、どこかできつともう起き出している。

その「どこか」が何処かわかりさえしたら。

友理子の心に、ようやく「現実」が形作られてきた。それは岩のように固く、重たい。その岩が友理子を押し潰している。友理子が、押し潰されていることすら感じないほど、完璧に。

二日後のことである。

今では、森崎大樹の起こした事件は、どのニュース番組でもトップ扱いになっていた。依然として行方不明のA少年。

お腹を刺されて、一時は意識不明の重体だった同級生が、回復の兆しを見せたという報道があった。森崎家ではテレビを点けっぱなしにしているのだ。が、A少年には自殺の危険があるというコメントが流れたときには、居合わせた誰かがあわててテレビを消した。誰かはわからない。ようやく到着した九州のお祖父ちゃんお祖母ちゃんか。それとも、来るなり口喧嘩を始めた水戸のお祖父ちゃんとお祖母ちゃんか。

森崎家のまわりには、取材記者やカメラマンがいつでもうろろしていた。

友理子はお母さんと二人で、ホテルに移るようになった。夏のキャンプのときに持って行ったリュックに衣服を詰めた。お母さんは、九州と水戸のお祖父ちゃんお祖母ちゃんにも、ホテルに移るように頼んでいた。げつそりと寝て帰ってきて、着替えてはまたどこかへ出かけてゆくといいパターンを繰り返していたお父さんが、みんなもここにいるても仕方がないから帰ってくれと言って、それでまたしばし険悪な雰囲気になった。

マスコミの人たち以後を尾けられないようにと、警察の人がホテルまで車で連れていってくれた。都内のどこかで、以前に友理子が家族旅行で連れて行ってもらったようなリゾートホテルとは違っていた。ビジネスホテルというのだと教えてもらった。従業員が少なく、自動販売機ばかりが目についた。

学校は、早引けして以来、休んでいる。

ほんの少し葉臭い匂いのするベッドに腰かけ、白い壁に掛けられた安っぽいプリントの抽象画を、友理子はぼんやりと仰いだ。額が傾いている。

家を離れて、ホテルに避難して。

当たり前だと思っていたものが、みんな消えた。

お兄ちゃんが持って行ってしまった。

お母さんはバスルームの戸を閉めて、携帯電話をかけている。やがてフラつきながら出てくる。壁につかまって友理子の方を見た。

「友理ちゃん、これから警察の人がここに来るんだって。いいかな」

友理子は黙ってお母さんの顔を見た。

「お兄ちゃんを捜す手がかりになるかもしれないから、友理ちゃんからも少しお話を聞きたいんだって。お母さんもそばにいるから、いいかな？」

嫌だなんて言わない。嫌だと言うなら、今の状況全部が嫌なのだ。

警察の人は、それから三十分もしないうちにやって来た。背広姿の男の人が一人と、制服を着た婦人警官が一人。狭苦しくて、椅子が二つしかないこの部屋でどうやって話すのかと思ったら、また車に乗せられて、警察署まで連れて行かれた。

なんか、手回しが悪い。

ドラマによく出てくる「取調室」という部屋に入れられたわけではなかった。きれいな会議室だった。そこでは、児童相談所の先生だという、お母さんと同じくらいの歳の女の人が待っていた。

友理子は急にカチンときた。どうして児童相談所の先生なんかがいるんだろう。お母さんが、

そう頼んだのだろうか。お兄ちゃんが問題を起こしたから、妹の友理子も自動的に問題児になった？ 児童相談所の先生にそばに居てもらわなくては、話もできないような。

「よろしく願います」

お母さんはみんなにべこべこ頭を下げている。

児童相談所の先生が猫なで声で話しかけてきたけれど、友理子は返事もせず窓の外に目をやった。

警察署の窓から外を眺めると、景色はこんなふうに見えるんだ。

タクシーのなかから見た町並みと、何も変わらない。変わらないところが、友理子にはうつすらと怖く感じられた。変わって見えただけだが、理屈が通るように思われた。警察署は特別な場所なのだから。そこに、今の友理子みたいな用件で連れてこられた人間は、特別な人間なのだから。

「それじゃ友理子ちゃん、少しお話ししようか」

背広姿の男の人が切り出した。親しそうに笑いかけてくるのに、妙に悲しげに見える。お兄ちゃんのことで悲しんでいるはずはない。だってお兄ちゃんを捕まえる側の人なのだ。この表情は、この人のおかしな八の字の眉毛のせいだろう。

質問はいろいろな言葉で、さまざま言い回しで投げかけられてきたけれど、要するに警察の人たちが聞きたいことはひとつだけだと、友理子はすぐに悟った。

このごろ、大樹君が変わった様子はなかったか。

変わったところなんかなかった。友理子にとって、この人がお兄ちゃんだと意識してからずっ

と、森崎大樹は変わることがなかった。

悩んでなんかいなかった。不機嫌でもなかった。いつものお兄ちゃんだった。

完璧なお兄ちゃん。

友理子はそれを、少ない言葉で、小さく答えた。自分でも、もっと大きな声を出そうと思うのだけれど、お腹に力が入らない。

「そうか……」

八の字眉毛の男の人が、手にしたボールペンのお尻で顎の先をつつく。

「大樹君の担任の先生のお話だと、大樹君は、二年生になってから、クラスの仲間と上手くいなくて悩んでいるようだったというんだよね。何かそんなようなことを、大樹君から聞いたことはないかな。ちよつとしたおしゃべりでもいいんだ」

友理子は、お母さんと児童相談所の先生に挟まれて座っている。男の人の質問に友理子が黙ったまましていると、児童相談所の先生が顔を覗き込んできた。

「友理子ちゃんは、お兄ちゃんと仲良かったのよね？」

友理子は返事をしなかった。口を結んで、膝の上に載せた自分の両手を見つめていた。ちよつと指を組み合わせてみる。

「友理子ちゃんの学校のこと、お兄ちゃんにおしゃべりすることはあつたでしょう。お兄ちゃんも、そんなときには自分の学校のことを話してくれたりしなかったかしら」

友理子が何も言わないので、児童相談所の先生はお母さんの顔に視線を移した。「いかがでし

ようか、お母さん」

お母さんもうつむいていた。隣から手を伸ばして、友理子の手をそつと握りしめる。冷たい。お母さんの手がこんなに冷えているなんて。

「男の子と女の子ですし、歳も三歳違いますから……中学生と小学生ですし……」

友理子の声よりも、さらに力が無かった。

「そうですね。そうですね」

児童相談所の先生が、自分で言つて自分で答える。そして警察の男の人の顔を見る。

みんなして誰かが口を開いてくれるのを待っているの、静まりかえつてしまった。

仲良しという言葉、友理子は心のなかで繰り返していた。お兄ちゃんと仲良し。友理子はお兄ちゃんと仲良し。

少し、違うと思つた。

仲は良かった。友理子はお兄ちゃんが好きだ。お兄ちゃんも友理子のことを嫌いじゃなかったはずだ。宿題を手伝ってくれたし、友理子とふざけてよく笑つたし、友理子のことを「チビ友理」とか「チビちゃん」とか呼んでいた。

テストの点が良かったとき、頭を撫でてくれたこともある。テレビで怖い映画を観てしまって、友理子が一人でトイレに行かれない夜には、わざわざ起きてついてきて、廊下で待っていてくれたこともあった。

仲良しというのは、もう少し違うことを指して言う表現なのではないか。友理子とお兄ちゃん

の間柄は、いつもお兄ちゃんが大きくて、友理子は小さくて、お兄ちゃんが上で、友理子はその足元で心地よく過ごしていた。

「大樹はこの子を可愛がっていました」

友理子の手をいつそう強く握り直しながら、お母さんが呟いた。

「ですから、この子に心配をかけるようなことはしないと思います」

そう、その言葉だ。「可愛がっていた」。それが友理子とお兄ちゃんの関係だった。

ずっとずっと、大人になつてもそのままはずだったのに。

「親のわたしたちにも、何も相談してくれなかつたくらいですから……」

お母さんの呟きが涙声に変わり、身体がぐらりと傾いた。

児童相談所の先生が、びっくりするほど素早く席を立ち、お母さんのそばに寄つて抱きかかえるようにして支えてくれた。それはとても優しい仕草だったし、先生に抱き留められたお母さんがひどく弱々しく見えたから、お母さんのために、友理子は初めて、この先生がいてくれてよかったと思つた。ありがとうと思つた。

すみません大丈夫ですと、お母さんが言う。

「そうですね。いや、我々も、是が非でも友理子ちゃんから何か聞き出そうというわけではないのです。ただ、大樹君を捜し出すための手がかりになりそうなことなら、どんな小さなことでもほしいものですから、念のために——」

ご無理を言つて申し訳ありませんでしたと、男の人と婦警さんが一緒に頭を下げた。

「もう帰っていいんですか」と、友理子は訊いた。

「お母さん、顔色が真っ白だから——」

「そうだね。どうもありがとう、友理子ちゃん。またホテルまでお送りしますからね、森崎さん」

帰りの車のなかでは、お母さんは目を閉じていた。眠っているのではなく、気を失っているように見えた。それでも友理子の手は握りしめて離さない。友理子もお母さんの冷たい指を温めてあげたくて、力を込めて握り返していた。

ホテル暮らしの日々は、単調に過ぎていった。

一週間経ち、十日経っても、森崎大樹は見つからなかった。

テレビのニュースは、大樹について取り上げなくなった。マンションのまわりを記者の人たちがうろつくこともなくなったと、お祖母ちゃんが報せてくれたので、友理子とお母さんは家に帰ることになった。

久しぶりにきちんと顔を合わせたお父さんは、げっそりと痩せて白髪が増えていた。

「友理子、いろいろごめんね。辛かっただろう。これからは、大樹が帰ってくるのを待ちながら、三人で暮らしていこう。大樹はきつと帰ってくるから、友理子も元気でいような」

お父さんは、一生懸命友理子を励まそうとしているのだ。お母さんも、お父さんの言葉にうなずいている。みんなで元気を出して頑張ろう。

そんなの無理だよという言葉を、友理子は呑み込んだ。無理だということを、両親だって知っているのだ。知っていて、友理子のために、無理の上に無理を重ねている。

ひとつだけほっとしたのは、お祖父ちゃんお祖母ちゃんたちが、それぞれの家に帰ってくれたことだ。そばにいれば、きつと泣いたり怒ったり、お母さんと喧嘩したり、お父さんを怒らせたりに決まっている。今まで、何事もないときだってそうだったんだから。

——うちの親戚はみんなうるさいからなあ。

お兄ちゃんがそう言っただけだ。

——お父さんの実家とお母さんの実家は仲が悪いしね。

友理子にはまだわからないだろうけど、とも言っていた。

お兄ちゃんにはわかっていたのだ。だつたらなぜ、お祖父ちゃんお祖母ちゃんたちが押しつけてきて、ふうふうぎゃあぎゃあ騒ぐに決まるとわかっている事をやったんだよ？

「今までどおりに元気に暮らす」というやり方のなかには、友理子がまた登校するということも含まれていた。当たり前のことだけど、お母さんに、友理ちゃんも来週から学校へ行こうねと言われて、友理子はちよつと頭のなかで空白になってしまうほどに驚いた。いや、驚きという感情ではないかもしれない。ピンとこないのだ。月へ行くと言われたのと同じくらい、現実感がない。学校の教室で机に向かい、授業を受けている自分自身を想像することができないのだった。

友達はどんな顔をするだろう？

友理子はどんな顔をしたらいいのだろう？

それでも現実はどうも動き、その週の金曜日の午後には、片山先生が家にやって来た。友理子の顔を見ると大げさなくらいに喜んで、

「みんな心配していたよ。授業のノートも、クラスの子たちが交代でとっておいたからね。勉強の方は、遅れたりしないよ」

そしてお母さんといういろいろ相談を始めた。途中から、友理子は自分の部屋にいるように言われた。

「先生とお母さんだけで、少しのあいだお話をさせてね」

リビングのドアも閉められてしまった。

友理子は自分の部屋に行きかけて、ふと気が変わった。

お兄ちゃんの部屋に行こう。

家に帰ってきてからも、お兄ちゃんの部屋に入る機会がなかった。いつもお母さんと一緒だったし、友理子が一人でテレビを見たり本を読んだりしているときには、お母さんがこっそりお兄ちゃんを部屋に入って、声を殺して泣いていたから、近寄らないようにしていた。そんなお母さんを見たくなかったし、お母さんだつて、自分で泣くだけでも辛いのに、友理子に泣き顔を見られるのは、もつともつと辛いだろう。

森崎大樹の部屋は、あの日、友理子がちらつと覗いたときそのままになっていた。あのときは椅子の背にかけられていたジャンパーが、袖たみにされてベッドの上に載せられていることだけが、唯一の違いだ。

間違い探しをしてみたいだ、と思った。いちばん大きな、でもいちばん見落とし易い間違いは、お兄ちゃんがないこと。

友理子は、きちんとたたまれたジャンパーの隣に、そつと腰かけた。友理子の軽い身体を、ベッドが柔らかく受け止めた。

窓の外を、にぎやかな音楽をかけた車が通りすぎてゆく。今日もいい天気だ。お兄ちゃんがいなくなってしまうたあの日と同じくらいに。

友理子は一人で座り、一人でそれを聞いている。

そして出し抜けに、忘れ物に気づいたように、あたしは今まで泣かなかつたなあ——と思った。涙がにじんできたことは何度もあったけれど、お母さんが泣くようには泣かなかつた。お父さんが泣いているのを見たときも泣かなかつた。

どうしてだろう。こんなに悲しいのに、なぜ声をあげて泣くことができないのだろう。

これが「呆然とする」ということなのだろうか。人は呆然すると、こんなふうに虚ろになつてしまうものなのだろうか。

友理子は、ぱたんと仰向けに倒れた。お母さんの手作りの、キルトのベッドカバーの上に。ベッドのスプリングがかすかに軋んだ。

カバーから、お兄ちゃんの匂いがする。

一人の人間が、匂いだけを残して、昨日まで着ていたジャンパーを椅子の背もたれに掛けっぱなしにして、姿を消してしまう。捜しても捜しても見つからない。そんなことが、この世の中で



起こっていいはずがない。

天井を仰いで、友理子はゆっくりと瞬きをした。

今でも信じられない。ホントだと思えない。

うちがこんなふうになってしまったこと。当たり前のように感じていた毎日の暮らしが、粉々に壊れられてしまったこと。それがとても大切なものだったことを、壊されてしまってから、やっと気がついた。

何かがこみ上げてきた。今度こそ自分は声を張り上げて泣き出すのだと、友理子は心のなかで身構えた。一方で、それを待っていた。泣けば救われる。嗚咽と一緒に、胸のなかの真つ暗な塊を吐き出してしまうことができれば。

だが、喉元まで上がってきたものは、涙ではなかった。友理子は奥歯を噛みしめた。  
どうして？

そう、こみ上げてきたのは問いかけだ。疑問だ。どうして？ どうして？ どうして？ どうしてお兄ちゃん、ナイフで友達を刺すようなことをしたの？ そんなことをやるほど悩んでいたのなら、どうして話してくれなかったの？ どこかへ逃げるなら、どうして家族にだけは、行き先を教えてくれなかったの？ どうして連絡してきてくれないの？

友理子は怒ってるんだよ、お兄ちゃん。

両足を持ち上げ、寝返りを打って、友理子はベッドの上で丸くなった。急に眠気がさしてきた。このまま寝てしまおう。眠って起きれば、悪い夢から覚めることができるかもしれない。これは

長くてしつこくて悪い夢なんだから。

目を閉じると、ベッドカバーに染みこんだお兄ちゃんの匂いが、友理子の頭と心のなかに広がってゆく。深く呼吸をする。心地いい。友理子は自分で思っている以上に疲れていて、身体は休息を必要としている。眠ろう、眠ろう――

瞼の裏に、薄ぼんやりとした光景が広がる。

それもまた夢、夢の断片だった。寝具の感触と温かみ、そして眠気。それが引き金になって、友理子が以前に見た夢が、風で本のページが勝手にめくられるのと同じように、ひらりとひるがえり、ちらりと見えて、すぐ元に戻った。

いつだったろう。夢のなかでこの光景を目にしたのは。一週間前？ 十日前？ もっと前だったかもしれない。その夢のなかにはお兄ちゃんが出てきた。お兄ちゃんの部屋のドアの隙間から、友理子が偶然に見かけたお兄ちゃん。友理子は冷たい廊下に立ち、お兄ちゃんの部屋のドアが十センチくらい開いていて――

スタンドの明かりが点いていた。お兄ちゃんは窓際で、膝をついていた。お兄ちゃんに向き合っていて、大きな黒い人影が見えた。お兄ちゃんは、その人影の足元にうずくまっているのだ。

あれは真夜中のこと。真夜中の夢。友理子はトイレに行きたくて、だからトイレに行く夢を見て、たまたまだけけど、わざとじゃないけど、まるで盗み見るみたいに、お兄ちゃんの部屋のなかを、ひよいと窺ってしまった。夢のなかで。

それにしても大きな人影だった。普通の大人よりもさらに大柄で、風船みたいに膨らんで見え

た。頭の上に何か載せている。てっぺんがぎざぎざに尖った——冠みたいな形のもの。そう、夢のなかの友理子の目にはそう映ったのだ。おかしな夢だなと思った。いいや、おかしな光景だったから、これは夢だと思ったのだ。なにしろ友理子は寝ぼけていた。

寝ぼけていたなら、寝てはいなかった？

あれは、夢じゃなかった？

床の硬くひんやりした感触を覚えている。足の指を縮めて歩いていた。トイレがとつても遠かった。くしゃみが飛び出しそうだった。

お兄ちゃんは、冠みたいなものをかぶった大きな人影に、深く頭を下げていた。

あ、お兄ちゃんはまだ起きてる。今にもこつちを見るかもしれない。友理子、トイレに行くんだよって言おう。寝る前に牛乳を飲んじやったから。

お兄ちゃんは、頭を前後に振り、額を床に擦りつけるようにしながら、何か呟き歌っていた。お兄ちゃんの前にぬうつと立ちはだかった黒い人影に、囁きかけるように。捧げるように。

その歌が今、ベッドの上で丸くなった友理子のくちびるから、ふっと漏れ出た。友理子の知らない歌、知らないメロディ、知らない言葉だ。なのに、ひと続きの調べをすっかり歌うことができた。

くちびるの動きが止まり、歌が止んで、友理子は横になったまま目を睜った。

今の、何？

あたし、どうしてこんなヘンテコな歌を知ってるんだ？ 口先だけが勝手に動いて、歌っちゃ

ったりして。

これ、夢のなかでお兄ちゃんが歌っていた歌だ。

「——ちゃん」

小さくひそやかな、夏の終わりの羽虫の羽音が聞こえてきた。今は春だから、生まれたての頼りない羽虫の羽音と言うべきか。

「嬢ちゃん」

その羽音は、こう聞こえた。じょうちゃん。

「嬢ちゃん、嬢ちゃん。起きておくれよ」

友理子は目を剝いたままがばりと起き上がった。そのまま静止する。部屋のなかに動くものはない。窓を閉めてあるので、カーテンをそよがせる風さえない。

友理子は天井の蛍光灯を仰いだ。蛍光灯からは、ときどきじーんという音がする。それが音声のように聞こえることだつてあるかもしれない。

「嬢ちゃん、俺はそんなところにはいないよ」

羽音が少し大きくなり、ますますはつきりと、言葉のように聞こえてきた。

「嬢ちゃん、こつちをご覧。本棚だよ、本棚」

友理子は身体の向きをそのままに、首だけをゆっくりりと、慎重によじつて、お兄ちゃんの机の方を見た。書棚は、机の隣の壁際に据えてある。

「そう、こつちだ。こつちに来ておくれよ」

虫の羽音じゃない。明らかに「声」だ。友理子に話しかけている。

画家のモデルをしているみたいな格好で固まったまま、友理子は口だけを動かした。

「だあれ？」

すぐには、返事がこなかった。友理子は身を固くして耳を澄ませていた。窓の外を車が通り過ぎてゆく音がする。

「誰なの？」

もう一度問いかける。また車が通る。

返事なし。友理子は気を緩めかける。あたし、また寝ぼけてた。

「ちよっと、答えるのが難しいんだ」

羽音が戻ってきてそう言った。

今度こそ、友理子はベッドから飛びあがった。逃げだそうとドアに突進して、靴下を履いた足が滑った。バランスを崩してドアに激突！ 目から火が出た。

「じよ、嬢ちゃん。そんなに怖がらないでくれよ。俺は怖いものじゃないんだからさ」

わんわんする頭のなかに、羽音が聞こえてくる。笑っているような、あわてているような口調で、そう、確かに怖い感じはしないのだけれど、

「ゆ、ユレーイ」

床に尻餅をついたまま、ドアにぶつけた頭を手でさすりさすり、友理子はあわあわと声を出した。

すかさず、虫の羽音が言う。「俺は幽霊じゃない。俺には幽霊のことは書かれていないし」

かかれてない？ 意味がわからない。どんな字をあてるの？ かかれて――

「俺は本なんだよ、嬢ちゃん。だからそんなところで腰を抜かしてないで、本棚へ来ておくれ」  
書かれて――書く、書かれたもの。だから本。

友理子はまだ立ち上がることができず、這ってお兄ちゃんの本棚に近づいた。ハイハイしながらの及び腰という、器用な格好になっていた。

お兄ちゃんの本棚には、いろいろな本が置かれている。参考書や事典、図鑑もあれば、マンガ本もある。お兄ちゃんはスポ根ものが好きだった。何冊かミステリーがあって、友理子はミステリーが好きだから、ねだって貸してもらったことがあるけれど、字の小さな文庫本で、読むのに苦労した。内容もよくわからなかった。お兄ちゃんにそう言うと、チビ友理にはまだ早いと笑っていた。

「上から二番目の棚だよ」と、羽音あらためて正体不明の「声」が言う。「手前にある本をすっかり出しておくれ。俺はその後ろに隠されてるから」

二番目の棚に並んでいるのは、『ハッフル望遠鏡がとらえた宇宙』とか、『星の観察』などの本だった。友理子は思い出した。去年の今頃だったろうか、お兄ちゃんは天体観測に興味を持って、天体望遠鏡をほしがっていた。かなり高価なものだし、お兄ちゃんは野球に忙しくて、それでなくとも時間がないのだから、このうえ天体観測なんか始めたら寝る時間がなくなってしまうと、いつもはお兄ちゃんのおねだりならたいいのことは聞いてしまうお父さんが、買うのを渋った。

で、それきりになってしまったのだ。

友理子は、きれいなカラー写真の表紙のついた、それらの本を一冊、また一冊と抜き出して、隣机の上に置いていった。その後ろには、天体観測の前にお兄ちゃんが興味を持っていた（森崎大樹には、野球以外のことについては、ちょっと移り気なところがあったのだ）、海の生物について書かれた本が並んでいる。

五冊抜き出したところで、『イルカ この素晴らしき海の聖者』という本と、『水族館へ行こう』という薄べったい写真集のあいだに、古ぼけた赤い革表紙の本が一冊、ひどく場違いな感じで挟まされているのが見えた。厚さが二センチぐらいの本だ。

「そうだよ嬢ちゃん。この赤い本が俺だ」

正体不明の声が、半分ほっとしたように、半分は友理子を励ますように、明るくなった。

友理子は右手の人差し指を伸ばし、赤い革表紙の本に触れようとして、その寸前で止めた。何というタイトルかな。背表紙には、見たこともない記号みたいな文字が並んでいる。金色の文字だ。すり切れて薄くなり、ところどころは完全に消えてしまっている。

「何という本？」

返事を期待して、尋ねてみた。指先も声も震えている。

「俺の名前を訊いているのだとしたら、嬢ちゃんには読めない。俺の内容を訊いているのなら、そうだな、嬢ちゃんに判るように説明するなら、俺は辞書だよ。特別な用途のある辞書だ」

「よう、と？」

「使い道ってことさ」

友理子の人差し指は、まだ宙に浮いている。

「さっきも言ったろ。俺は怖いものじゃない。嬢ちゃんがビククリするのは無理もないし、俺だってそれは重々承知してたけどさ」

見られなかったから、という。

「とにかく、俺を手を取っておくれ。そしたら、もつと話をし易くなる」

友理子はいったん指を引つ込めた。両手を握り合わせる。震えが止まらない。

ごくり、と喉が鳴る。

一瞬だけ目をつぶった。そして目を開くのと同時に、ずいど手を出して赤い革表紙の本を本棚から引き抜いた。

次の瞬間、本を投げ出そうとした。

手のなかのその本は、羽根のように軽く、ほのかに温かかったのだ。人肌、という感じだった。

友理子がつきさに、本を振り払うように手を動かすと、本は振り落とされまいと、友理子の指にからみついてきた。表紙がしなった感触が、確かにあった。気味悪い！

「わ、わ、わ」

「乱暴に扱わないでくれよ。俺はもう古いからね。綴じ目が緩んでいるからさ」

自分の意志とは裏腹に、気がつけば友理子は、両手で大事に赤い革表紙の本を捧げ持っていた。「嬢ちゃん、その椅子に座りな。俺のことは、その机の上に置けばいい。ページを開いて、嬢

ちゃんの掌てのひらを載せておくれ」

「どこを開くの？」

「どこでもいいよ」

言われたとおりに、お兄ちゃんの椅子にお尻を落とすと、友理子は赤い本を机の上に載せた。本が自己申告したとおりに、よく見ると、それはかなり傷いたんでいた。

友理子は本の真ん中を開いた。背表紙の薄れて消えた文字と同じ、記号みたいな字列がびっしりと並んでいる。紙は焼けて黄色くなり、ところどころに穴が開いている。

「ホントに古い本だね……」

友理子は呟き、右の掌を着ているトレーナーのお腹なかのあたりでごしごしこすってから、そっとページの上に載せた。

やんわりと、掌を下から撫でられるような感触が伝わってきた。やっばり、ほの温かい。

「ああ、嬢ちゃんは、見た目よりもっと幼いんだね」

赤い本がそう言った。これまでの羽虫の羽音から、ちゃんとした人の声へと変わっている。

「わ、わかるの？」

「わかるよ」

「あたし、十一歳なんだけど」

「嬢ちゃんたちの世界で数えると、その歳としになるってことだね。嬢ちゃんの兄ちゃんはいくつなのかな？」

森崎大樹は十四歳だ。

「そうか。やっばり幼いね」

歎なげくように言う。友理子はむっとした。

「お兄ちゃんはまだもう幼くなんかいないよ。子供じゃないもの。お父さんもお母さんもそう言ってる。まだ大人になりきってはいないけど、子供でもないって」

だから難しい年頃としごろなのだ、いつか両親が話していたことがある。友理子はちらりと聞きかじってしまった。でもお父さんもお母さんも、大樹なら何があっても心配ないと、嬉うれしそうに、自じ慢まん気に語っていた。

「いやいや、幼いんだよ。充分に幼いんだ」

掌を通して、赤い本の声が伝わってくる。耳で聴いているというより、心に直じかに響いてくるような感じがした。

「ねえ……あなたでもしかして、本の精？」

「嬢ちゃんはそのような言葉を知ってるんだね。どこで覚えたの？」

本の精せい霊れい。本のスピリット。

「映画とかに出てくるから——」

「ああ、物語だね」

俺も物語だよ、という。

「ただどあなたは辞書なんでしょ？」

「辞書だけど、物語なんだ。書かれたものには、すべてのものに物語が宿るから。というより、物語の方が先にあるんだよ」

掌から伝わってくる本の波動に、言い聞かせるような優しさが含まれている。古くて汚れていて壊れかけた本なのに、それに触れていることが、友理子にはちっとも不愉快ではなかった。

「嬢ちゃん、ごめんよ。本当は嬢ちゃんに話しかけないでおこうと思っていたんだ。そんなことをしたって何にもならないからね。けど、嬢ちゃんがさつき、歌を歌ったものだから」

「あたしが？」

勝手にくちびるからこぼれ出た、わけのわからないあの歌だ。

「あれ、嬢ちゃんは何の歌だか知らないだろ」

友理子はうなずき、夢のなかでお兄ちゃんが歌っていた歌だと説明した。そのときの夢の光景についても話した。

と、赤い本がふるふると震えるのがわかった。

「そうか、嬢ちゃんは見ちまったんだね。だったら、やっぱり話しかけてよかったのかな。うん、よかったんだな」

一人で納得している。一冊で納得していると表現した方がいいか。相手は本だ。

「ヘンテコな夢だったの。夢のなかで覚えた歌を歌っちゃったの」

「歌の意味はわからないよね？」

「わかるわけないよ」

「それでいいんだ、うん」

赤い本が、また友理子の掌を撫でてくれる。おかしい感覚だけど、確かにそうだ。

「嬢ちゃん、その歌は二度と歌っちゃいけないよ。忘れることだ」

何々をしてはいけないという禁止命令は、いつどんな時代でも、子供の好奇心をくすぐる最高の呪文だ。友理子はちよっと乗り出した。掌を強く本のページに押しつける。

「どうして？ 何で歌っちゃいけないの？」

「そんなに強く押さないでくれよ、嬢ちゃん」 友理子はあわてて手をゆるめた。赤い本は、ちようど人間がぎゅうぎゅう押されて苦しかったときみたいに、呼吸を整えるような震え方をした。

「あれは良くない歌だからだよ」

友理子は少しのあいだ黙っていた。再び、頭のなかに、お兄ちゃんがあの歌を歌っていたときの、おそろしく普通ではない姿勢や状況が浮かんでくる。今度は意識して思い出したので、細かいところまではつきりするように思えた。

と、赤い本がまた身震いをした。友理子の掌に、人間の肌がよじれるような感覚が伝わってきた。

「ああ、そうだよそうだよ。それがあれさ」

「あれって？」

あれさ——とだけ呟いて、赤い本は黙る。

「あたしの見たものが、今、あなたにも見えたのね。あたしの心を覗いたの？ それ、超能力？」

尋ねてから、自分で吹き出してしまった。超能力なら、今の友理子こそ發揮しているのではないか。なにしろ本と会話しているのだ。

「まあ、そんなようなもんだね……」

この赤い本、怖がってるみたい。

「あれって、恐ろしいものなの？」

「嬢ちゃんは怖くなかったのかい？」

何度も何度も床に頭を擦りつけていたお兄ちゃん。お兄ちゃんを見おろしていた大きな人影。威張って、そっくり返ってるみたいだった。

ふと、ある言葉を思いついた。

「お城の王様、オレ一人」

赤い本が「え？」と問い返す。「今なんて言った？」

「お城の王様よ」

友理子は本を見つめてうなずきかけた。

「あたしが見た大きな人影は、絵本やファンタジー映画に出てくる昔の王様みたいな格好をしたの。冠もかぶってた」

「マントは見たかい？ ぼろぼろだったろ」

そうか！ あれの身体全体がふくらんでいるように見えたのは、背中を覆おおって足首まで届くマントをまどつていたからだだったのか。

「薄暗くて、そこまではわからなかった」

「じゃ、あれの顔は見てないね？」

赤い本は、それが本当に肝心なことだというふうには、友理子が思わず表紙から掌を離してしまふほど、強い力を込めて問いかけてきた。

「——暗かったから」

「見てないね？」

「うん、見なかった」

それならいいんだと、赤い本は言った。本の全体に漲みなぎっていた力が、すうっと抜けたように友理子は感じた。

「あれって、そんなに怖いものなの？ どこの国の王様？」

赤い本は押し黙っている。突然、普通の本に戻る気になつたらしい。でも友理子の掌は、本の呼吸を感じ取っていた。何か大きな心配事があるときに、大人たちはよくそうする。深く吐いて、吐ききって、少し止まって、思い出したように吸って、また吐く。

二年ほど前のことだけれど、友理子のお父さんが会社の健康診断で引っかかって、再検査でまた引っかかって、さらに詳しい検査を受けるために大きな病院へ行ったことがある。その当時、お母さんが家で、台所にテーブルに一人でぼつんと腰かけているときなど、そういう呼吸の仕方

をしていた。届く限りの悪い想像をしながら息を吐いて、それを振り切つて大急ぎで息を吸う。お父さんの場合は、幸い、ほどなくして深刻な病気ではないことが判明し、お母さんの心配呼吸はしまいかまれた。でもあのリズムを、友理子は今も忘れていない。

そんなにも恐ろしい存在。

それに頭を下げていたお兄ちゃん。

友理子の小さな頭のなかに、暗い光が灯った。

「もしかして——お兄ちゃんがあんな怖いことをやったのは、あの王様みたいなものとか関係があるのかな」

赤い本がビクリとした。

友理子は目を丸くする。「そうなの？ そうなのね？ あたしの言ってること、あたってるんだね？」

本が返事をしないので、友理子は両手でつかんで揺さぶつてやった。「教えてよ！ ね、教えてつてば！」

「じ、じよ、嬢ちゃん、落ち着いて」

「落ち着いてなんかいらんないわよ！」

わかったわかったと、赤い本は音をあげた。

「そうだよ。あれは悪いものだ」

人間に取り憑いて、悪い事をさせる——

途端に、友理子の膝から力が抜けた。本を抱きしめてへたへたと座り込む。

兄が姿を消してから今日まで、両親や先生たちはともかく、友理子自身には、何ひとつ筋の通った説明が与えられてこなかった。それを求めようとすると、友理子がそんな心配をしなくてもいいとか、友理子は知らなくていいとか、両手で通せんぼされる。たつた今、赤い本が酔っぱらつたみたいに震えながら（友理子がかつぱく揺さぶつたせいだ）ぼろりとこぼしてくれた言葉は、友理子が初めて得た解答なのだった。

ああ、泣いてしまっそうだ。

「お兄ちゃんらしくないって思ってたんだ」

ホントに涙がこぼれてきた。赤い本の表紙に、一滴、二滴と落ちる。

「あんなこと、お兄ちゃんがするはずないんだ」

そうだよねと、赤い本がとても優しい声を伝えてきた。「嬢ちゃんの兄ちゃんは良い子だもの。友達を傷つけたり、命を奪つたりなんかできる子じゃない」

「——知ってるの？」

「知ってるよ。短いあいだけけど、近くにいたからね」

友理子は手で顔をこすり、涙を拭いた。そうだ、この本はお兄ちゃんの本棚に隠されていたのだ。

「だからね、嬢ちゃん。俺も一生懸命とめたんだよ。気をつけるって忠告したんだ。けど、嬢ちゃんの兄ちゃんには届かなかつた。あんまりにも早く、あれに魅入られてしまったから」



あれに比べたら、俺はとても弱い。赤い本は、恥ずかしそうに身を縮めて（実際、そういう感触がしたのだ）呟いた。

「あれには、とてもかなわない。あれは『英雄』というものだから」  
「英雄？」

その言葉なら、友理子も知っている。ヒーローだ。とても偉くて強い人のことだ。歴史上の人物ならば、立派なことをした人だ。スポーツ選手ならば、記録に残る活躍をした人だ。そして、だいたいは物語の主人公だ。それがどうして悪いものなのだ？

「あんだ、嘘つきね。英雄が悪いものであるわけじゃないの」

「嬢ちゃんはそういうふうにならねえんだね」

「そんなの常識だもん」

ジョーシキかあと、赤い本はため息をつくように言った。「なら、そう思っておいで」

友理子の掌の下で、本の感触が変わった。温かみが消え、呼吸も感じられなくなった。今度こそ、話しかけてくる不思議な赤い本は、古ぼけたただの本に戻ってしまったらしい。

「ちょっと、待ちなさいよ！」

友理子は本を揺さぶり、上下逆さまにし、背表紙をつかんでページをゆさゆさしてやり、思いつく限りの乱暴なことをやった。それでも本は黙りを決め込んでいる。

「そんなあ」友理子は泣き声を出した。「ひどいじゃない。何でそんな意地悪するの？」

本が相手では、女の子の涙の抗議も通用しない。友理子はカッとなって、渾身の力を込めて赤

い本を壁に叩きつけた。本は開いた格好で壁にぶつかり、べしやりと床に落ちた。下になったページが折れてしまっている。

痛いとも言わないし、怒りもしない。睨みつけても、もう何も起こらない。

友理子は本をそのままに、気持ちの半分は喧嘩に勝ち、半分は負けてすごとと、大樹の部屋から退却した。

赤い本のこと、両親には話さなかった。説明のしようがない。自分でも、おかしな夢でも見ていたような気分だった。その晩の夕食の場では、明日から友理子が登校すること、最初だからお母さんが付き添って行ってくれること、友理子はこれまでと同じようにお友達と仲良くすること——そんな話ばかりをしていた。

赤い本は、壁際にべしやりと伏したまま、ほったらかしにされた。

翌日、友理子は予定通りに登校した。学校では、校長先生、教頭先生、木内先生、担任の片山先生が勢揃いして校長室で迎えてくれて、お母さんが何度も頭を下げた。先生方も頭を下げた。それから友理子は、片山先生に連れられて教室へ行った。

一時間目の授業が終わって、最初の休み時間、佳奈ちゃんが泣きそうになって抱きついてきた。心配してたよ。また会えてよかったよ。まわりの同級生たちも、ニコニコしたり、半べそ顔だったり、わざと知らん顔をしている子たちも、けっして冷たい感じではなかった。

良かった——元通りなんだ。お兄ちゃんがいなくなったことだけを除けば、何も変わってなんかいない。友理子の心は弛みかけた。

でも、そんなのは見せかけに過ぎなかった。

三時間目の授業が終わって、友理子は佳奈ちゃんとトイレに行った。事件はまずそこで起きた。顔は知ってるけど名前は知らない、隣のクラスの女の子たちが、友理子と佳奈ちゃんと入れ違いに、どやどやとトイレに入ってきた。友理子の顔を見ると、あつというような表情を浮かべた。目が輝く。ぎろぎろと底光りするように。面白いものを見つけた。変わったものを見つけた。いじってみよう。目から手を伸ばしてくる。そんな感じが生々しく伝わってくる。

ヤダな。早く出よう。

すれ違うとき、友理子の手が軽く、その子たちの一人の手にあたった。本当に軽くあたったただけだ。よくあることだ。なのにその子は、火傷<sup>やけど</sup>でもしたみたいにはつと飛び退いて、大げさにあわて始めた。

「わぁ！ ごめんなさい！」

一緒に来た女の子たちも悲鳴のような声をあげて騒ぎ出す。

「森崎さんでしょ？ ごめんね！ ホントごめんね！ わざとやったわけじゃないの！」  
だからあたしのこと刺さないでねえ〜！

トイレの冷たい壁に、天井に、がんがんと反響する声だった。女の子たちは襲われたみたいに悲鳴をあげ、競い合ってトイレから逃げ出した。スイングドアが大きく翻<sup>ひるがえ</sup>る。廊下に飛び出すと、彼女たちの悲鳴はゲラゲラという笑い声に変わった。

友理子は立ちすくんでいた。

ふと見ると、佳奈ちゃんが真っ青になっていた。

四時間目の授業は、友理子の頭の上を通過していった。隣の席の佳奈ちゃんは、友理子が佳奈ちゃんを見ていないときは友理子を見ていて、友理子が佳奈ちゃんに目をやると、急いで目をそらした。友理子を見ていないのに、友理子に謝っているみたいな顔をして。

給食の時間に、次の事件が起きた。生徒たちと一緒に配膳<sup>はいぜん</sup>をしていた片山先生のところに、友理子のお母さんくらいの歳の女の人が、ひどくあわててやって来たのだ。先生ではないし、学校の事務員さんでもない。誰か同級生のお母さんだということがわかるまで、ちよつとかかった。

そのお母さんは、あわてているだけでなく怒っていた。片山先生をつかまえてけんけんとか何か言い、一方で自分の子供を呼んで——深山さんという女の子で、友理子はあまり親しくない——しつかりと引き寄せた。ときどき友理子の方に鋭い視線を飛ばしてくる。片山先生は顔色を変えて、何とかそのお母さんを廊下へと連れ出したけれど、それまでに言葉のいくつかが耳に飛び込んできた。

犯罪者。人殺し。うちの子が。説明がなかった。とても我慢できない。学校は何を考えて。親もどうかと思う。

断片的でも、意味はわかった。

そのときになって、初めて気づいた。何人か、欠席している同級生がいることに。

友理子は犯罪者ではないけれど。

友理子は人殺しではないけれど。

お兄ちゃんと同級生を殺した犯罪者だ。友理子はその妹だ。そんな友理子がいるクラスに、自分の子供を置いておくんなんて我慢できない。深山さんのお母さんはそう言っているのだ。友理子が今日から登校してくるなんて聞いていない。聞いていたら放つてはおかなかった、学校は何をしているのだと怒っているのだ。

深山さんのお母さんは、怒りながら怯えていた。その隣で、お母さんの手を握りしめ、深山さんも怯えていた。ほかの誰でもない、友理子に怯えていた。そしてその目は、ちよっぴり、ほんのちよっぴりだけど、友理子を嘲笑<sup>あざわら</sup>つてもいた。バカみたい。のこのこ学校に来るなんて。何考えてるんだよ。

ふと見ると、教室にいる同級生たちが、みんな友理子を見つめていた。そのなかには佳奈ちゃんもいた。

一人、また一人と背中を向ける。こそこそと脇を向く。給食のお皿に目を落とす。食器の鳴る音がする。にぎやかなのに、生徒の声だけが存在しない教室。

友理子というブラックホールが、みんなの声を吸い込んでいるのだ。

友理子は持ち物を鞆に放り込み、片山先生が戻ってくる前に、学校から逃げ出した。

うちへ帰る、うちへ帰る、うちへ帰る。友理子の心のなかで暗黒のオルゴールが回って音楽を奏<sup>かな</sup>でる。うちへ帰る、うちへ帰る。もう二度と学校へはこない。

学校にはもう、友理子の居場所はない。

膝が笑い、顎<sup>あご</sup>ががくがくした。一步走る度に世界が揺れて、友理子が踏んだ場所が砂のように

崩れてゆく。

家に着くと、リビングに飛び込んでお母さんに抱きついた。深山さんのお母さんに負けないほどの声で、友理子も喚<sup>わめ</sup>き、叫んでいた。

それから二人で、長いこと抱き合つて泣いた。

友理子はもう学校へは行かない。あの学校へは行かない。

その夜、遅くなつてから、友理子はまたお兄ちゃんの部屋に入った。両親に知られたくないので、明かりは点けない。窓からの街灯の光で充分だ。

赤い本は書棚に戻っていた。手前の列の端っこに、きちんと立てられていた。お母さんがお兄ちゃんの部屋に入つて、拾い上げてくれたんだろう。折れたページも直してある。

友理子は近づいて、そつと指で本に触れた。

魔法が蘇<sup>よみがえ</sup>っていることがわかった。赤い本の背表紙は、ほの温かい。

嬢<sup>ぢやう</sup>ちゃんかと、本は訊いた。友理子は黙つてうなずき、声を吞んで泣き始めた。泣いても泣いても、まだ涙が出る。

思わず、赤い本を胸にかき抱いた。

「――痛かつたんだからな」

本が口を尖<sup>とが</sup>らせている感じがする。ごめんねと、友理子はポロポロ泣いた。

「嬢ちゃんも痛かつたみたいだね」

優しい震えが伝わってきた。うん。友理子は頭を垂れて、本を抱いたまま壁際に座り込んだ。昼間、学校であったことを打ち明けた。行きつ戻りつ、泣きじゃつくりをあいだに挟んでの打ち明け話はひどく混乱していて、でも、赤い本には通じているらしかった。そして赤い本は、友理子がうわごとのようにしゃべっているあいだじゅう、ひとつのことしか言わなかった。よしよし、もう泣くんじやないよ。友理子が何を言っても、どれだけ泣いても。よしよし、もう泣くんじやないよ。

「みんなそうなんだよ」

やがて友理子の話が尽き、この場で流す涙が涸れたころ、本はそう言った。

「みんな、嬢ちゃんと同じような思いをするのさ。誰かが『英雄』に憑かれてしまうよね」

俺は大勢見てきたから、よく知ってる。本は歌うようにメロディを付けて、友理子にそう伝えてきた。途方もない永い時間のなかで、数え切れないほどの回数、俺たちは涙の河を渡ってきた。

「誰にも、どうすることもできないんだ。可哀相だけど、起こってしまったことは元に戻せな  
ら」

時間を巻き戻すことはできないのだから。

「嬢ちゃんはこれから、ずっとおうちにいるんだろう？ ゆっくりするといい。時間は、今は嬢ちゃんの敵だけど、しばらくすると味方になってくれるものだから」

「それ、忘れられるっていう意味？」

「……たぶんね」

そんなの無理だ。できっこない。

「だってお兄ちゃんがないんだもの」

兄の不在は、友理子の時を停めてしまう。森崎家の時を凍りつかせてしまう。

「昨日の話、ね」友理子は本を顔の前に持つてきた。「あなたはもつというんなことを知ってるんでしょう？ お兄ちゃんが何であんなことをやったのか知ってるのなら、お兄ちゃんが今どこにいるのかも知ってるんじゃない？」

赤い本が返事をためらっている。ということは、凶星なんだ。

「お兄ちゃんは、今どこにいるの？ 『英雄』に憑かれてしまった人はどうなるの？ どこかに連れていかれるの？ 閉じこめられたりとかしているの？」

問いは、先に口から出たものに引きずられるようにして、次から次へと湧き出てきた。

「お兄ちゃんは、自分がそうしたくて友達を刺したわけじゃないんだよね？ 『英雄』に憑かれて、酷いことをやらされたんだよね？」

ひと呼吸だけ間を置いてから、本は答えた。

「そうだよ」

それがあれの本性だから。人を操り、戦争を起こし、世の中を乱すことが。本の言葉は難しく、友理子は顔をしかめて考えねばならなかった。

「『英雄』が戦争を起こすの？ あたしの知ってる英雄は、戦争を終わらせた人たちだよ」

いろいろな物語に書いてある。教科書にだって、そう書いてあるのだ。

「始まりと終わりは同じものなのさ、嬢ちゃん。頭と尻っぽがつながってる」  
ますますわからない。あたしは、そんな謎みたいな話をしたいわげじゃないんだ。

「それなら、お兄ちゃんは悪くないよ。お兄ちゃんが悪いわけじゃない。悪いものに捕まって、恐ろしいことを嫌々やらされたんだから」

お兄ちゃんは被害者だ。犠牲者だ。

「助けなきゃ」

声に出して言ってみると、目の前でその言葉が形になり、暗い部屋の宙に浮き上がって見えるような気がしてきた。光り輝いている。

「助けに行かなきゃ。ねえ、お兄ちゃんがどこにいるのか教えて」

パッと閃いた。「もしかして、あなたのなかにそのことが書かれてるの？ だからあなたは『英雄』のことをよく知ってるんじゃないの？」

言うが早いのか、友理子は赤い本を開こうとした。が、驚いたことに、本は頑強に抵抗する。

「何よ！ おかしいじゃない」

本が身体を突つ張り、脚をふんばり、友理子の力に抗うのがはっきりわかる。友理子はムキになって赤い表紙を引つ張った。それでも本はページを開こうとしないのだ。

「あんた、本の、くせに」

昨日はペラペラしてたくせに！

「助けることはできない」と、赤い本は言った。もう歌うような口調ではない。優しい震えも伝

わつてはこない。

「英雄」に囚われた者を、救い出すことなんかできないんだ。人の力では無理なことだ」

「できるわよ！ どこにいるかわかれば、すぐにだってできる！ 警察とか消防署の人とか、うちのお父さんお母さんだって——」

「どんでもない！ 大人になんか、何もできるもんか。『英雄』に近づくとどこか、この世界から出ることさえできないんだから」

「また、わけのわからないことを言う。」

「いいから、あんたの中身を読ませなさいよ。書いてあるんでしょ、手がかりが。大切なことが」

友理子は、窓越しに差し込む街灯の白い光のなか、きちんと片付けられた兄の部屋で、赤い本と取っ組み合いを始めた。あとで思い出してみると、いったい全体どうやったのか、自分でも見当がつかなかった。なにしろ相手は本なのだ。でもその場では、人間の男の子——ちょうど森崎大樹と同じぐらいの年頃の男の子と格闘しているような気分であつたのだ。

もちろん、分は悪い。実際にお兄ちゃんと取っ組み合いの喧嘩なんてしたことはない友理子だが、力でも手足の長さでも素早さでも負けている。が、女の子には最終兵器というものがある。

友理子は歯を剥き、本の表紙に噛みついた。赤い本がぎゃつと叫んだ。友理子の手のなかで半回転して宙に飛び、表紙を下にして床の上に落ちた。

息を切らしながら、友理子は本を拾い上げた。気のせいだろうけれど、シヨックでぐったりし

ているように見える。表紙の角に、友理子の歯形がうつすらとついている。歯並びはいいのが我慢だ。

「ひどいことするなあ」と、本が呻いた。

「あんたが意地悪だからよ」

「俺の身なんか、嬢ちゃんには読めやしないよ。表紙に書いてある文字だって読めないだろ」  
冷静に考えてみればそうなのだ。

「嬢ちゃんがこんな痲癩かんじやく持ちだとは思わなかった。見かけによらないね」

赤い本は、驚くよりも傷ついているようだった。すぐく人間っぽい。

「だけどね、どんなに鋭い歯を持っていたって、所詮しょせん嬢ちゃんは小さい女の子だ。兄ちゃんを助けることなんかできない。いい子だから、涙を拭ぬぐいて涙なみだを飲んで、おとなしくお寝み。朝になったら元気を出して学校へ行くんだ。そうやって、今までと変わらない暮らしを続けられるように、努力していくしかないんだよ」

お説教だ。友理子の痲癩はおさまっていたものの、腹立ちはそのままだ。そこに輪をかけてムカムカしてきた。

「今までと変わらない暮らしなんてできない」

「やってみることさ」

「学校へ行ったら、あたし、いじめられるもの」

「味方になってくれる友達だって、きつといるだろうよ」

「あんたなんか何がわかるのよ。ただの本のくせして」

本はしばらく沈黙ちんもくした。それから、ちょっと口調を変えた。「なんだ、要するに嬢ちゃんは学校へ行きたくないんだね。兄ちゃんを助けにいきたくないなんて、逃げ出すための口実じゃないか」

友理子はもういつペン、この本を力任せに床に叩きつけてやろうと思った。が、その手は宙で止まった。本を頭の上まで振りあげたところで、とても悲しくて、自分で自分が恥はづかずかしくて、目の奥が熱くなる。

友理子は腕を降ろすと、赤い本を大樹の書棚にそっと戻した。

「よしよし、それで結構」本は満足げに言った。

「おやすみ、嬢ちゃん」

本から手を離し、部屋を出よう。今にもそうしよう。話は終わりだ。

ううん、終わりじゃない。

「ホントに、お兄ちゃんを助けることはできないの？ さっき、大人にはできないって言ったよね？ お父さんにもお母さんにも、警察の人たちにもできない」

「ああ、そうだ」

「あたしにもできない。あたしは小さい女の子だから。ね、だったら、ほかに誰かいるの？ 誰かお兄ちゃんを助けることができる人はいらる？」

「——そんなことを訊きいてどうするんだい？」

「その人のところに、お兄ちゃんを助けてくださいって、お願いしに行く」

何が何でも頼んで頼んで、きいてもらおうのだ。

「だから、知ってるなら教えて。お兄ちゃんを助けられる人が、どこかにいる？」

友理子は時計を見ていなかったから、返事があるまで、どれくらいかかったかわからない。赤い本は、永いこと迷っていた。

「この世界には、いなじ」

そう答える本の「声」には、これまでにない厳かさがあった。

「嬢ちゃんのいるこの世界から他所へ行かないと、嬢ちゃんの兄ちゃんを探すための手がかりは得られないよ」

でも、まったく術がないわけではないのだ。

「大人はこの世界から出ることさえできないって言ったのも、そういうこと？」

「うん、そうだ」

「あたしは子供だから、できる？」

だったら、そこへ行こう。

「どこ？ 外国？ 飛行機に乗らないと着かないような場所？」

「そういう意味の『他所』じゃないよ。嬢ちゃんのいるこの『輪』の外だ」

『輪』とは世界の意味だ。この場合の世界というのは、「世界史」とか「世界地図」とか、友理子が知っているような意味の言葉ではない。もっとずうっと広いと、本は説明した。

「嬢ちゃんが一生のうちにいくことがないこの星の端っこであろうと、宇宙の彼方だろうと、俺

たちから見ればそこも嬢ちゃんたちの『輪』の内側だ。嬢ちゃんたちの世界——狭い意味での世界の物語が宿っている『輪』のなかでしかない」

相変わらず、よくわからない。でも、肝心なことはひとつだけだ。

「でも、あたしが本当に行きたいと願うなら、そこに行かれる？ あなたが連れてってくれる？」

子供だからね……と、赤い本は呟いた。

「子供だから、こんな大きなことでも、簡単に決めてしまえる。一生と引き替えになるかもしれない決断なのに」

呆れているような、感心しているような。

「仕方がないね。嬢ちゃんに話しかけて、興味を持たせてしまったのは俺だからな。責任がある」

友理子の胸の奥が、きゅうつと苦しくなってきた。悲しみや怒りのせいではなく、こんなふうになるのは、何と久しぶりのことだろう。

「ありがとう！」

「お礼を言うのはまだ早い。嬢ちゃん、これは大仕事なんだ」

自分一人では何もできないと、赤い本は言った。「だから、嬢ちゃんはまず、俺を仲間たちのところへ戻してくれなくちゃならない」

どっちにしろ、入口もそこだし——と、謎のようなことを小さく言い足す。

「わかった。どこ？ 本屋さんかな。図書館？ あなた古い本だから、古本屋さんか」

赤い本はくすぐったそうに笑った。「嬢ちゃんは面白いね。そうか、忘れちゃまっているのかな」  
忘れてる。友理子が、何を？

「嬢ちゃんは本気で、兄ちゃんが、俺みたいな何が書いてあるかわからないような本を、そんな普通場所から持ってきたと思うのかい？ 考えてごらんよ。思い出してごらん。どれくらい前かなあ、まだ寒いころだったよ。嬢ちゃんも兄ちゃんも、温かそうなコートを着込んでた。そのころ、俺みたいな本が数え切れないほどたくさん集まってる場所に、みんなで出かけて行った覚えはないかい？」

すっかり考えてみるために、友理子はまた本を手にとると、座り込んだ。まだ寒いころ。コートを着て。みんなと一緒に。

「みんな——家族で？」

「そうだ」

白い息を吐きながら。数え切れないほどの本が集まっている場所へ。

友理子は目を睜<sup>みは</sup>り、ついでに口まで開いてしまった。「それ、叔父さんの別荘じゃない？」

「正確に言うと、嬢ちゃんの父ちゃんの叔父さんだけだね。大叔父さんだ」

去年の十二月、最初の日曜日のことだった。家族みんなで、お父さんが車を運転して出かけていったのだ。

「うん、あの別荘にはすっごい図書室があつて、まるで図書館みたいだってビックリしたの」

「俺はあそこにいたんだ」赤い本は言つて、声を潜<sup>ひそ</sup>めた。「『英雄』も、そこにいた」

友理子は思い出したり考えたりするのに忙しくて、本の眩<sup>つや</sup>きを聞いていなかった。大叔父さんの別荘、場所はどこだっけ？ 日帰りだったから、そんなに遠いはずはないけど、けっこうな山のなかだった。途中で舗装されていない道に乗り入れなくちゃならなくなって、お母さんが不安がった。

「あたし一人じゃ、あんなどこまで行かれないわ。住所だつて知らないし、道がわからない」

「じゃ、どうする？」赤い本は面白そうに問いかける。「嬢ちゃん、これが最初の試練だな」